

第7回占冠村ヒグマミーティング実施報告書

第7回占冠村ヒグマミーティング実行委員会事務局

1. 事業名称：占冠村公民館自主創造プログラム事業 第7回占冠村ヒグマミーティング

2. 事業形態：対象の主を村民とする、一般参加型ワークショップ形式の公開講座

3. 運営組織

(1) 主催 第7回占冠村ヒグマミーティング実行委員会

〒079-2201 勇払郡占冠村字中央 占冠村教育委員会 社会教育担当 内
委員：門間敬行（代表）、浦田 剛（事務局）、下川園子、有光良次

(2) 共催 占冠村公民館、富良野地区広域教育圏振興協議会

(3) 協力 占冠村（担当部署：農林課 林業振興室 野生鳥獣専門員）

酪農学園大学 環境共生学類 野生鳥獣管理学研究室

酪農学園大学 環境共生学類 野生動物生態学研究室

帯広畜産大学 獣医学部 解剖学研究室

北大ヒグマ研究グループ

占冠・村づくり観光協会

4. 日 時：令和6年1月27日（土曜）9：30～17：00

5. 場 所：占冠村総合センター2階 視聴覚室及び相談室（占冠村字中央）

6. 参加者数：68名（実行委員、講師等スタッフを含む）

7. 企画概要

占冠村において地域に根付いたヒグマ対応力を高めるため、住民、村役場ほか関係機関等が、情報共有と意思疎通を継続的に行いながら、関連知識や対応技術の向上を図るため、有志によるワークショップ形式の村民講座「占冠村ヒグマミーティング」を企画開催した。過去、令和元年から令和5年にかけて同様の目的で6回の取り組みがなされており（別紙参照）、今回が7回目であった。今回の特徴として研究発表の分量を増やし、また隣接する2部屋を使うことによって来場者

が過ごしやすい会場環境づくりを試みた。

準備にあたり有志 4 名により第 7 回占冠村ヒグマミーティング実行委員会を組織した。占冠村公民館により自主創造プログラムとして採択されたほか、併せて富良野地区広域教育圏振興協議会の共催を受けた。また占冠村（農林課林業振興室）に依頼し、資料提供と野生鳥獣専門員派遣等の協力を受けた。酪農学園大学ほかの教育研究機関から合わせて 12 名の研究発表を得た。さらに占冠・村づくり観光協会から、缶バッジ製作機材の無償貸与と製作資材購入の便宜を得た。

8. 実施経過の概要

実施計画は事務局で素案作成の後、委員と講師で打ち合わせを行い、会場配置、当日のスケジュール、講演内容、準備作業の分担について順次詳細を決定した。参加者の募集は村広報 1 月号折込み広告、占冠村教委ホームページ、富良野沿線各教委ホームページ、村内要所 7 か所のポスター、村内行政区回覧、過去参加者への電子メール伝達等により実施した。前日までに占冠村企画商工課の協力を得て資機材の搬入と動作確認作業を行った。

当日は 8 時から 9 時にかけて順次スタッフが参集し、会場の設営、案内看板の設置を行った。スタッフ扱いとしたのは村民実行委員と家族、野生鳥獣専門員、農林課長、広報担当の 10 名と各大学等の 22 名の計 32 名であった。会場は「ひぐまひろば」と「ヒグマ会議」の 2 部屋とし、通路を開放して常時往来可能とし、「ひぐまひろば」に設置した大型の液晶モニターにより、ヒグマ会議の講演状況を同時上映した。「ひぐまひろば」は予定通り 9 時半に開場し、一般参加者が来場した。ヒグマ会議は予定より約 10 分遅れて開始した。来場者は各々自由に出入りし滞在の時刻時間は一定ではないが、スタッフと合わせ受付名簿上 68 名（うち子供 12 名）であった。参加者の内訳と開催次第は別紙資料の通り。

「ヒグマ会議」の進行は浦田（実行委員兼野生鳥獣専門員）が担当した。やや遅れを生じつつも、予備時間で調整することで予定の発表と討論をすべて実施できた。

「ひぐまひろば」は常時開設し、下川委員、有光委員を中心に来場受付や各種体験コーナーの利用案内を行った。各種実施項目ごとの実施状況は別項のとおり。

「ヒグマ会議」は予定通り 16 時に終了し、参加者らも交えて座席の片付けと原状復帰が速やかになされた。その後も「ひぐまひろば」は歓談の場として引き続き利用されたが、17 時をもって撤収作業に入り 17 時半ごろに完了、18 時までにスタッフ全員が解散した。

9. 各種実施項目概況

(1) ヒグマ会議

発表13題と総合討論を行った。聴講者席は40～45人分で概ね8割程度が埋まったほか、「ひぐまひろば」のモニターで聴講していた参加者もいた。午後の部の冒頭には、午後からの参加者に配慮して午前中の発表の要約を口頭で解説した。

以下事務局のメモに基づく各発表の要約を記す。

(1-1) 令和5年期の村のヒグマ情勢 (浦田/占冠村)

当年度に村内で確認されたヒグマの動きについて、情報数による概況、秋の特異性とミズナラ豊凶、人身被害防止の観点による特記事案9件、農作物利用と対策状況に分けて解説した。(別紙資料参照)

(1-2) 2023年の占冠村内でのヒグマ研究報告 (伊藤哲治/酪農学園大学)

野生鳥獣管理学研究室(伊藤ゼミ)の村内調査活動の概況と、過去4頭のGPS標識個体の追跡状況について説明した。全体状況として当年は前年期までと比較して取得サンプル数が多い、調査活動中のヒグマ遭遇も多いなどの所感が得られていた。GPS調査はこれまで所定の期間にわたる追跡はできておらず、現在追跡中の2頭への期待と来期の速やかな捕獲着手の方針が語られた。

(1-3) 占冠村および旭川市のヒグマの糞分析 (小木曾稔介/酪農学園大学)

旭川市と占冠村のヒグマ糞内容物をポイントフレーム法で調査した結果の報告。それぞれの地域で内容物の季節変化が見られたほか、シカと農作物の出現が旭川市で多く占冠村で少ないとの結果も得られた。この背景は環境の違いからも考察されたが、同時にサンプリングの数や偏りの影響もあるものと見られた。(卒業研究)

(1-4) ヒグマGPS測位データによる利用環境調査 (今井和歩/酪農学園大学)

過去4頭のGPS標識個体の追跡データから、行動圏と集中行動域の特定、さらに地図情報(植生)との突合による評価を試みたもの。雌雄による広さの違いや季節的な変化は、繁殖行動や餌資源密度などの一般的な知見により考察されたが、個体、実地特有の要因に迫るため、さらに現地調査の必要性について提起された。(卒業研究)

(1-5) 酪農大圃場でのニホンジカの被害対策効果 (金谷光起/酪農学園大学)

江別市の大学農場で行ったエゾシカの行動観察と電気柵を用いた防除実験の結果報告。行動評価は自動撮影頻度を用いた。電気柵の設置により侵入の抑制が示唆される結果を得られている。電気柵は設置条件を万全とはしづらい上で、不完全なるその効果をいかほど高めて維持できるかがカギであり、「理想的でない」条件による実験の積み重ねに期待が持たれる。(卒業研究)

(1-6) ヒグマの行動を読み解くための匂いコミュニケーション研究 (富安洵平/帯広畜産大学)

ヒグマの皮膚サンプルの観察による臭腺の発達状況から、生理学的な発達の仕組み、特異的な行動との関連、生態学的な役割など多角的にその研究課題の奥行きを示した。またほ乳動物一般の匂いコミュニケーション、臭腺発達に係る基礎知識についても丁寧に説明された。社会性に乏しいとされるヒグマの秘めた社会性を解き明かしていくエキサイティングな研究像が強く関心を引いた。

(1-7) 藪を漕ぎ漕ぎ考える～学生グループによるヒグマ研究 (伊藤康幹/北大ヒグマ研究グループ)

北大ヒグマ研究グループの50年近い歩みと現状を紹介。痕跡調査や直接観察などグループが重視してきた初歩的かつ普遍的な手法、近年導入した自動撮影調査、独特の生活文化まで、生き生きとした研究生生活が語られた。フィールドワークに際する地域社会とのかかわりについての所信にも言及され、受け入れる地域側の立場である村民参加者らの関心と共感を集めた。

(1-8) 匂いによるアライグマ誘引効果と捕獲への応用 (田中 蓮/酪農学園大学)

アライグマのわな捕獲に適した誘引物を選ぶため、野幌森林公園において誘引及び捕獲実験を行ったもの。自動撮影装置を用い、周辺に生息するネズミ等の誘引状況と合わせて適否の評価を試みた。醤油粕やキャラメルコーンはアライグマ、ネズミともに誘引し、ナンプラーや発酵液でアライグマ>ネズミの結果を得た。捕獲率への寄与は確認できなかったが、液体誘引物の有用について可能性を提起した。(卒業研究)

(1-9) アライグマの普及啓発に関するアンケート調査 (青木慧斗/酪農学園大学)

アライグマ捕獲の推進のため、地域住民の意識づくりの方法と効果を探る調査を行った。占冠村で一般住民が集まる催事(収穫祭と紅葉祭り)で普及啓発コーナーを設置し、対象者個別に資料を示して対面で説明し、またアンケートを取って説明前後の意識を調べた。同様に大学でも関係者に対して実施した。普及活動によってアライグマの生息に否定的、捕獲や根絶に肯定的な意識が伸びることが示された。(卒業研究)

(1-10) 被害対策がヒグマの農作物被害に与える影響 (直島夕花/酪農学園大学)

占冠村内のデントコーン圃場における防除実験と痕跡調査。2021年から2023年にかけての調査データを用い、柵なし、防鹿柵、防鹿柵+電気柵などの条件別に周縁部での自動撮影頻度、侵入発生頻度、被害面積を比較した。電気柵を設置した圃場で撮影頻度、侵入発生頻度の低下を見たが、同時に電気柵の突破事例もあり、今後さらに電気柵の資機材選定や設置方法の研究を進めるべきことを示した。(卒業研究)

(1-11) 野生動物の被害対策と作物収量の関係 (金井大地/酪農学園大学)

占冠村内のデントコーン圃場における自動撮影調査、ヒグマ痕跡調査、被害量調査の中間報告。自動撮影頻度により年別、圃場別のヒグマの動向を追った。条件のばらつきが大きく傾向は判然としないものの、各圃場の防除条件と被害量に差異が見られ

た。今後、標識個体の追跡情報や遺伝子情報による個体識別と組み合わせるなど、よりその行動実態に基づく形での被害構造の解明が期待される。(修士課程中間報告)

(1-12)ニホンカモシカの個体間の距離と血縁関係 (中野あかり/酪農学園大学)

生物多様性保全の観点で着目すべき個体数や生息地の尺度を検討するため、長野県のニホンカモシカ捕獲個体から得られた遺伝子サンプルによる地域個体群の血縁関係を解析した。父子、母子の個体間距離は当該種の行動パターンに強く依存し、つがいを構成しナワバリ性が強いカモシカが示す分布特性と、ヒグマやニホンジカのそれとの比較に興味を持たれた。(卒業研究)

(1-13)浦幌・白糠丘陵の長期的ヒグマ研究の経緯と展望 (菊地静香/酪農学園大学)

酪農学園大学野生動物生態学研究室(佐藤喜和ゼミ)のヒグマ研究活動の概況と来歴を紹介。教官の所属遍歴による実施組織の変遷を経ながらも、地域社会と連携した浦幌ヒグマ調査会を核に25年余に及び一貫性のある生態研究を実現した。当地域の生息環境の勾配(農作物を介した対人軋轢の多い浦幌と少ない白糠奥地)やシカ生息密度の変化、農業形態の変化を背景に、継続的な遺伝子解析と糞分析によって流動的な個体群動態、食性変化の解明を進めた。またこうした基幹的課題と並行して画像解析による性判別などユニークな研究も多くちりばめられている。長期的な視点で思い切った資源投下をし、洗練されたルーティンを確立していること、地域社会とのつながりを太く持つことが注目された。

(1-14) 総合討論 総合質疑

時間調整により45分間の計画を20分間に縮めて実施。参加者からの質疑のほか、進行役から課題提起により自由発言によって進めた。以下にその一部の要旨を示す。

◆村はこれまで個体管理にこだわり、問題個体の特定と段階的な対応をしてきた。

これからは個体の所在や個体数を対象とした管理が求められる。「当面無害」な個体を撃つべきなのか？

▶道内でも地域によって状況には差があり、様子を見ながら地域社会の納得できる対応を講ずるべき。

▶ヒグマの対人行動が変化しているのでは。どうして？これからどうなる？

▶そもそも正常な習性が明らかでない。基本的に人を避けてくれるとの習性も経緯による今ならではのものでは？ヒグマの潜在的な能力も踏まえた対応も。

▶これまでの追払いは評価できるが、動物の人慣れの構造を考えて見ねば。追い払いの積み重ねも無害な対人接触経験であり、事態を悪化させるかも。

▶自由で強いヒグマの行動を人の都合で制限するためには、どこかで暴力的な衝突は必然。そのとき勝つことが重要。

◆人の身の回りでの犬の活動(飼い犬、野犬も含めて)の衰退がヒグマの進出をもたらししていることはないか？犬の活用を考えられないか。

- ▶犬がヒグマに襲われる、犬がヒグマの対人攻撃を誘発するなどの可能性があり、無条件で犬が有用とはいかない。目的を絞って適した犬種でよく訓練されていることが必要。
- ▶犬による忌避効果も不確か。仮に犬への忌避効果があったとしても、それが人への忌避効果に結び付くかは疑問。
- ▶野放しの犬が増えることは別のリスクを生む。
- ▶いわゆるベアドッグは、対策員とともに行動し、その活動を支え、またその効果を助長するもの。犬の導入により人が楽できるわけではない。地道な訓練というその現地対応がある。その上で検討することは有益。
- ▶ヒグマのことを知りたい、ヒグマの害を退けるために働きたいと願っているのは人間ではないのか。犬に能力があるとの理由で犬任せにするのは気乗りしない。
- ◆今回のヒグマミーティングは会場設定、講演の分量、ひろばのコンテンツも新たな試みがあった。今後の開催に向けての意見は？
 - ▶どんな形でも、こうした取り組みがあることは重要。ぜひ継続されたい。
 - ▶楽しかった。
 - ▶いろいろな地域で工夫して実施されたい。
 - ▶講演が多すぎるとか長すぎるとは思わなかった。ただ、声が聞き取りづらいことがあった。
 - ▶2部屋で伸び伸びできた。
 - ▶缶バッジの企画はよかった。またやってほしい。

(2) ひぐまひろば

9時半から17時まで常時開設としたフリースペース。体験、閲覧コンテンツも用意した。ヒグマ会議の間も年少者やその保護者、学生ら多くが滞在した。各々の実施概況は以下のとおり。配置は別紙参照のこと。

(2-1) 受付

受付台ひとつに来場者記入用紙と会場案内(A4両面刷1枚、別紙資料参照)を置いた。下川委員と有光委員が対応した。

(2-2) ヒグマ会議モニター

隣接するヒグマ会議会場にビデオカメラを置き、スクリーンと演者を映した画像・音声データをHDMIケーブルでひぐまひろば会場の大型液晶テレビ(デジタルホワイトボードシステム)に送って上映した。カメラは村職員の私物を借用した。録画、録音は行わなかった。ひぐまひろば利用中の来場者、ひぐまひろばの担当スタッフが会議の様子を視聴した。自由にくつろいで参加できる環境づくりのほか、ヒグマ会議の満席対応にもなった。画像の写りや音の聞こえがいまひとつで、調整を要した。

(2-3) 塗り絵コーナー／キッズコーナー

背なしソファを並べて長机で囲み、靴を脱げる小上がりを構成した。長机の外側には通常の椅子を配置し、色鉛筆や色ペン、クレヨン、紙などの画材を用意した。今回特製の塗り絵の図案もボランティアにより用意され、印刷して供用した。塗り絵の作品は会場のホワイトボードに一時的に掲示するなどしたのち、制作者が持ち帰った

(2-4) オリジナル缶バッジ製作コーナー

長机ひとつに観光協会から借用した専用プレス機を据え、希望する来場者ひとりにひとつずつ、その場で缶バッジを作って無料で進呈した。スタッフの動線に配慮して受付台と背中合わせに配置した。主に下川委員が対応した。缶バッジは直径 32 mm の安全ピン付きで、図柄の紙を封入する構造。予め 10 種程度の実行委員会オリジナルデザインを印刷して用意したほか、白紙もしくはロゴのみの白紙枠を用意して自由に描いてもらった。缶バッジの資材も観光協会から分量を借り受け、後日使用分のみ清算した。頒布した 56 個と見本として保存した 8 個を合わせて 64 個を製作した。

(2-5) 書籍、文献閲覧コーナー

浦田委員が収集収蔵するヒグマや野生鳥獣関係の書籍、酪農大等から進呈を受けた論文の写しを持ち込み、長机に並べた。幼児向けの絵本はヒグマ関係に限らず織り交ぜた。多くの来場者に利用された。

(2-6) 標本展示コーナー

長机を並べ、浦田委員が収集収蔵する骨格や毛皮、糞等の実物標本を陳列した。また酪農学園大学伊藤ゼミが持参したヒグマトランクキットの構成品も同様に並べた。今回は解説員や説明表示を十分に用意できなかったが、実物標本を見て触れる貴重な機会を来場者に提供できた。さらに会場の雰囲気づくりにも寄与したと考えられる。

(2-7) 資料掲示コーナー

茶菓コーナーの上の壁に、ヒグマ会議の内容に関連するポスター資料を掲示した。構成は「占冠村のヒグマ対応」「酪農大佐藤ゼミ」「酪農大伊藤ゼミ」「帯畜大富安助教」「北大クマ研」の 5 点とした。

(2-8) ヒグマ作品展

予め応募のあった絵画彫刻他の作品を展示するもの。今回は木製自作のヒグマパズル 2 点が寄せられた。同作品はヒグマ会議の午後の部の冒頭でも披露し、絶賛された。
(別紙資料参照)

(2-9) ヒグマゲームコーナー

会場の一角にテレビモニターとノートパソコン、コントローラーの 3 点セットを 2 組用意した。ゲームは前回 (2023 年) に製作のもの 3 種を流用した。コントロー

ラーは汎用の外付けテンキーから不要キーを取り外してカバーし自作した。子供や学生を中心に盛んな利用があった。

(2-10) 茶菓コーナー

会場の一隅に電気ポットひとつと20個程度の紙コップ、インスタントコーヒーの粉や日本茶、紅茶のティーバッグ、飴玉を置いた。利用は多くはなかった模様であるが、くつろげる雰囲気づくりの小道具として機能したものと思われる。

(2-11) クマ撃ち体感コーナー（計画のみ）

会場の窓から見える屋外にヒグマ形の模擬標的を設置し、来場者が模擬銃を構えて照準する動作を通じてヒグマ狙撃の模擬体験を行うもの。当日、屋外の模擬標的は設置したものの、模擬銃側に担当者をおく準備をできず、また他の区画に比して優先度も低いとの判断で実施を取止めた。

(2-12) 休憩コーナー

窓際に机と椅子を配置し、自由に使えるものとした。

(2-13) その他の事項

使用する部屋は集中暖房区画のため、当日は村総務課の許可を得てボイラーを運転した。会場建物前面の国道に面した箇所に仮設看板を設置したほか、玄関、廊下、階段等各所に会場やトイレへの経路を表示する掲示を行った。授乳等の場所として、当日急遽、隣の和室を確保したが、最終的に利用はなかった。

10. 成果と課題

(1) 全般

当事業においては事故、怪我、係争等を生ぜず、また多くの参加者を得て、予定の内容を実施できた。当事業は一定の成功を見たものと考えられる。

(2) ヒグマミーティングの基本構想について

科学的知見の普及、学習を対策の基盤に据えること、地域のさまざまな関係者が集まって情報共有と相互交流を持つことなどのヒグマミーティングの基本的な理念は、今回の総合討論の結果からも概ね支持されているものと思われ、この先も継続して活動していくに値するものと考えられる。

(3) 今次ヒグマミーティングの実施計画について

出来るだけ多くの参加希望者が無理なく参加でき、できるだけ豊富な情報を十分な時間をかけて提供でき、年少者や高齢者にも体力的な負担が少なく、できるだけ楽しく快適な催事とすることを願って毎度工夫を重ねてきた。比較的に内容が充実し

ていたのが第1回、第2回、第6回であったが、第1回は単純な半日講演会で休憩時間に歓談の余地があるのみであった。第2回では1日を3つの時間帯に分け、子供向けの内容、工作や絵画などの体験もの、専門家による講演など、多彩な内容を順に繰り出した。この時から子供たちを重要な参加者とする姿勢を確立した。その後コロナ対応の時期は簡素化して村報告と伊藤ゼミの卒業研究発表に終始したが、第6回ではひとつの会場で講演の聴講（ヒグマ会議）とそれ以外の活動、過ごし方（ひろば）を同時並行で提供する形態を導入し、内容の充実と楽しさ、過ごしやすさの両立を追求することとなった。しかし講演聴講以外のための空間が手狭で、また半日に及ぶ講演でも希望される内容を盛り込み切れなかった。

こうした経緯を踏まえ、互いに隣接し交通が容易な2会場を使うことで「会議」に気兼ねなく「ひろば」利用者が過ごせる広い空間を確保したことが、今回の第一の特徴である。「ひろば」のテレビモニターで「会議」の様子を同時放送することで、長く、時に緊張感もある「会議」の聴講を負担に感じる人や、「ひろば」に拘束されるスタッフや保護者も講演の内容に触れることを可能にした。実施中、モニターの画質や音量に不満を生じたことは、モニターに利用ニーズがあったことの証左とも考えられる。2会場が隣接し、自由に往来ができ、程よく相互の息遣いが伝わることで、どちらにいても参加者としての一体感が得られた。こうした会場設計の要素は今後も環境に応じて活かす余地があると考えられる。

今回の第二の特徴として、ヒグマ会議に午前2時間午後3時間、全14題というかつてない分量の講演、討論を詰め込んだことが挙げられる。一般住民向けとしてはかなり挑戦的な企てであったが、前出の空間づくりの効果もあってか大きな不満はなかった。学習会の充実度を上げるために時間量を増すことは順当であるが概ね限界でもあり、今後は講演の質（テーマの適性、見やすさ、聞きやすさ、分かりやすさ）を上げることで更なる改善を図りたい。

第三の特徴はオリジナル缶バッジ製作であった。初の試みであったが、占冠・村づくり観光協会の協力により円滑に実施できた。資材費は一個当たり70円で、富良野地区広域教育圏振興協議会の補助を受けて64個分を調達した。参加者の多くが利用し好評であった。今後も状況が許せば利用を検討したい。

ヒグマミーティングの開催時期について、今回も含めて冬に行うことが恒例となっているが、ほかの季節はヒグマ対応等で忙しいことを考えるとやむを得ないところである。懸案となっている実地の勉強会はまた別枠として、フィールドシーズンの開催を目指したい。

ヒグマミーティングの開催場所の選定については、会場に適した施設の所在のほか、字中央と上トマムの両方で開催を重ねて全村的な交流や地域特性の掘り起こしをしたいとの思いがあった。運営実務上は字中央での開催の方が便利であるが、上ト

マム開催にも同地区住民のニーズがあり、また中央周辺地区住民を上トマムでの催事に呼び込める貴重な機会となるなどの利点があった。今回は準備の手数を局限するために前回に続き中央での開催としたが、次回については各方面の要望を踏まえ、改めて検討したい。

歴代のヒグマミーティングの運営主体は、有志住民グループによる実行委員会を立てての公民館事業自主創造プログラムとする形と、村の担当部署（林業振興室）直営のいずれかであり、今回は前者を採った。いずれにしても実質的には村の野生鳥獣専門員と有志村民ボランティア、酪農学園大学などが協力して企画運営する点は同じである。自主創造プログラム方式では若干事務が増える一方、経費の補助を得られるメリットがあり、より発展的な内容（今回は缶バッジ企画）を追求することができた。また今回は富良野地区広域教育圏振興協議会の事業になったことから、沿線自治体の広報メディアを通じた告知ができた。今後も状況が許す限りは住民主体の体をなし、財源を得て内容の充実を図ることが望ましいと考えられる。そのためには予め企画調整の手間を見込んで着手せねばならない。

参加者募集の告知については、村広報 1 月号折込みが最初で、その後詳細を行政区回覧で回したが時機を逸して回りきらなかった。ホームページの告知や村内各所へのポスター掲示も含め全体的に、計画立案作業の遅れを受けて時期内容ともに不満を残すものとなった。子供の参加がやや少なかったが、今後は各家庭の予定に組み込んでもらえるよう早めの告知を心がけたい。開催情報の周知だけでなく、参加の動機づくりとして、作品展や住民による発表、学校と連携した事業など、前もって様々な楽しみを埋め込んでおくことも考えられる。今後も工夫を続けていきたい。

大学など村外の教育研究機関との連携について、重要な情報インプットをもたらすものとして今回も含めて歓迎されるものであった。漫然と招待するだけでは一方通行に聞かだけとなるが、村民側の知的蓄積を進めることでよりの確な疑問を提示でき、討論を活発にできると考えられる。双方向の交流を続け相互理解を深めていきたい。知識の伝達普及はどちらかといえば表向きの成果であり、より重要なのは不明領域に対する知的姿勢、ネガティブケイパビリティの浸透ではないかと考えられる。探求の喜びを共有しながらヒグマ生息地住民としてのセンスを養っていきたい。

11. 総括

上項に示す状況から、第 7 回占冠村ヒグマミーティングは内外の協力を得て一定の成果を得たものと考えられる。今般、人とヒグマの関係性が問われ、地域社会もより能動的にヒグマへの関与を求められる時代となった。有力な実行力を擁する地域社会を作るためにも、私たち村民の「ヒグマ知」が求められている。ヒグマを知りたいとする欲求は、この土地で暮らしたい、この土地で働きたいとする欲求に寄り添う

ものであり、絶えざるニーズを信じて引き続き、ヒグマミーティングのあり方を模索していきたい。

12. 謝辞

今回の開催にあたり以下の方々、関係機関のご協力をいただいた。実行委員一同より心から謝意を表します。(順不同)

占冠村（農林課林業振興室、企画商工課、総務課ほか）、占冠村公民館（占冠村教育委員会）、富良野地区広域教育圏振興協議会、北海道猟友会富良野支部占冠部会、占冠・村づくり観光協会、酪農学園大学野生動物生態学研究室、酪農学園大学野生鳥獣管理学研究室、帯広畜産大学獣医学部解剖学研究室、北大ヒグマ研究グループ、鈴木智宏氏、有光志穂氏、浦田香純氏、浦田格氏、伊藤清美氏、伊藤美羽氏、伊藤瑛美氏、ほかご来場の皆様

13. 別紙資料

- ・別紙資料1 第7回占冠村ヒグマミーティング告知ポスター
- ・別紙資料2* 参加者名簿・集計表
- ・別紙資料3 第7回占冠村ヒグマミーティング開催要領（会場配布資料）
- ・別紙資料4 会場配置図等
- ・別紙資料5 実施状況写真等
- ・別紙資料6 占冠村発表「令和5年期の村のヒグマ情勢」スライド抜粋
- ・別紙資料7 ヒグマ作品展出展作品
- ・別紙資料8** 第7回占冠村ヒグマミーティング実施計画
- ・別紙資料9** 第7回占冠村ヒグマミーティング決算報告
- ・別紙資料10** 第7回占冠村ヒグマミーティング実行委員会設置要綱

資料の構成について

* …部内向け報告書に付す名簿は参加者氏名を記載し、部外秘扱いとした。一般向け報告書に付すものは参加者氏名を伏せた。

** …部内向け報告書にのみ収録した。

部内向け報告書の配布先 ～ 実行委員、講師、占冠村、占冠村教育委員会

第7回占冠村ヒグマミーティング告知ポスター



第7回占冠村
ヒグマミーティング



1月27日(土)

ひぐまひろば
9時半～17時

ヒグマ会議
10時～16時

占冠村総合センター
(村役場庁舎) 2階
視聴覚室・相談室

占冠村ヒグマミーティングは、ヒグマに強い地域づくりを目指す村と村民有志、専門家による学習会です。ヒグマを巡る社会情勢が騒がしい昨今ですが、腰を据えてヒグマを直に調べ、伝え、学び続ける営みが大切ではないでしょうか。7回目の今回も、村の年次報告や教育研究機関の最新の研究結果をご紹介します。私たちの「ヒグマ知」を深めます。さらに皆さまの疑問や意見も交えながら、ヒグマと隣り合う私たちの暮らし方を考えてみたいと思います。

フリースペース「ひぐまひろば」9時30分～17時

開催中は常設です。お好きなときにご利用ください。ヒグマ会議の時間帯も利用でき、モニターで会議の聴講もできます。くつろいでお過ごしください。

- 書籍、文献閲覧コーナー
- 標本、模型展示コーナー
- 研究発表等掲示コーナー
- 資料映像上映コーナー
- ヒグマ作品展
- ヒグマゲームコーナー
- 塗り絵・工作コーナー

「ヒグマ会議」 午前の部10時～12時、
午後の部13時～16時頃

担当者、研究者が口頭発表します。またご参加の皆様と質疑応答、意見交換を行います。前回より時間枠を広げました。どっぶりノメリこみましょう！

- ◆令和5年期の村のヒグマ情勢(村)
- ◆研究発表(酪農学園大学・帯広畜産大学ほか)
- ◆これからのヒグマ対策と研究課題(総合討論)



対象者：どなたでも参加できます。児童、生徒、学生、村外の方も歓迎いたします。小さなお子様をお連れの方もご遠慮なく。

参加料：無料です。会場は出入り自由です。

申込み：申し込みがなくても参加可能ですが、事前に参加をお決めでしたら、ぜひ下記担当へお知らせください。開催要領の変更等の際、個別に連絡致します。

お問い合わせ、お申込み連絡先：第7回占冠村ヒグマミーティング実行委員会事務局

電話 090-8966-3000 (野生鳥獣専門員 浦田)

The residents meeting about bears
Jan.27th, 9:30AM-5:00PM. Shimukappu Village Hall

ご参加のQRコード



きて



第7回占冠村ヒグマミーティング来場者数

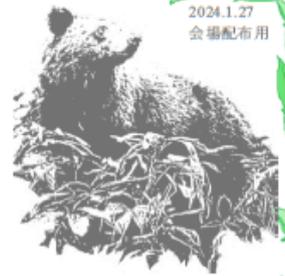
村内スタッフ	7
村外スタッフ	22
ほか村外関係機関	3
村外一般	6
村内一般 (村内一般うち子供)	30 (12)
合計	68

(参考) 2023年2月11日 第6回来場者数

	会場	オンライン	合計
村スタッフ	4	1	5
酪農大	9	6	15
ほか村外関係機関	5	1	6
村外一般	3	0	3
村内一般 (村内一般うち子供)	44 (18)	3 (1)	47 (19)
合計	65	11	76

第7回占冠村ヒグマミーティング開催要領（会場配布資料）

第7回 占冠村ヒグマミーティング 「ヒグマのフシギしらべてためして」



ご 来 場 あり が と う ご ざ い ま す

占冠村ヒグマミーティングは、ヒグマに強い地域づくりを目指す、村と村民有志、専門家による学習会です。皆様からご質問、ご意見を承り、議論を深めていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

と き：令和6年 1月27日（土曜日）

と ころ：占冠村総合センター（村役場）2階 視聴覚室 & 相談室

フリースペース「ひぐまひろば」9時半～17時

開催中は常設です。お好きなときにご利用ください。ヒグマ会議の時間帯も利用可能です。会場にはスタッフが常駐し、ご質問ご意見を随時承ります。

- 書籍、文献閲覧コーナー
 - 標本、模型展示コーナー
 - 塗り絵・工作コーナー
 - ヒグマゲームコーナー
 - ヒグマ作品展
 - オリジナル缶バッジ制作コーナー
- 缶バッジ制作をご希望の方はコーナー担当か受付まで



「ヒグマ会議」 午前の部10時～12時、午後の部13時～16時頃

担当者、研究者が口頭発表します。またご参加の皆様と質疑応答、意見交換を行います。前回より時間枠を広げました。どっぴりノメリこみましょう！

》》》》 演題の詳細は裏面をご覧ください <<<<<

- ※ 途中の出入りは自由です。
- ※ 発表内容、配布物等の無断転載はおやめください。
- ※ 撮影画像、音声等の利用は個人の学習目的に限り、発表スライドの撮影はご遠慮ください。そのほかは担当にお問い合わせください。



ご注意：会場では村の広報や報道機関の取材が想定されます。特に撮影や取材を避けたい方は、会場担当までお申し出ください。

主催：第7回占冠村ヒグマミーティング実行委員会 共催：占冠村公民館／富良野地区広域教育圏振興協議会 協力：占冠村

お問い合わせ先：第7回占冠村ヒグマミーティング実行委員会事務局
電話 090-8966-3000（野生鳥獣専門員 浦田）

第7回 占冠村ヒグマミーティング会場配布資料（裏面）

「ヒグマ会議」 発表演題（予定）



10:00～

- ・令和5年期の村のヒグマ情勢・・・・・・・・・・浦田 剛 （占冠村 野生鳥獣専門員）
- ・2023年の占冠村内でのヒグマ研究報告・・・伊藤哲治 （酪農学園大学 講師）

11:00～

- ・占冠村および旭川市のヒグマの糞分析・・・・・・・・小木曾粹介 （酪農学園大学 4年生）
- ・ヒグマGPS測位データによる利用環境調査・・・今井和歩 （酪農学園大学 4年生）
- ・酪農大園場でのニホンジカの被害対策効果・・・金谷光起 （酪農学園大学 4年生）
- ・ヒグマの行動を読み解くための匂いコミュニケーション研究・・・富安洵平 （帯広畜産大学 助教）
- ・糞を漕ぎ漕ぎ考える～学生グループによるヒグマ研究・・・伊藤康幹 （北大ヒグマ研究グループ）

12:00～13:00 休憩

13:00～

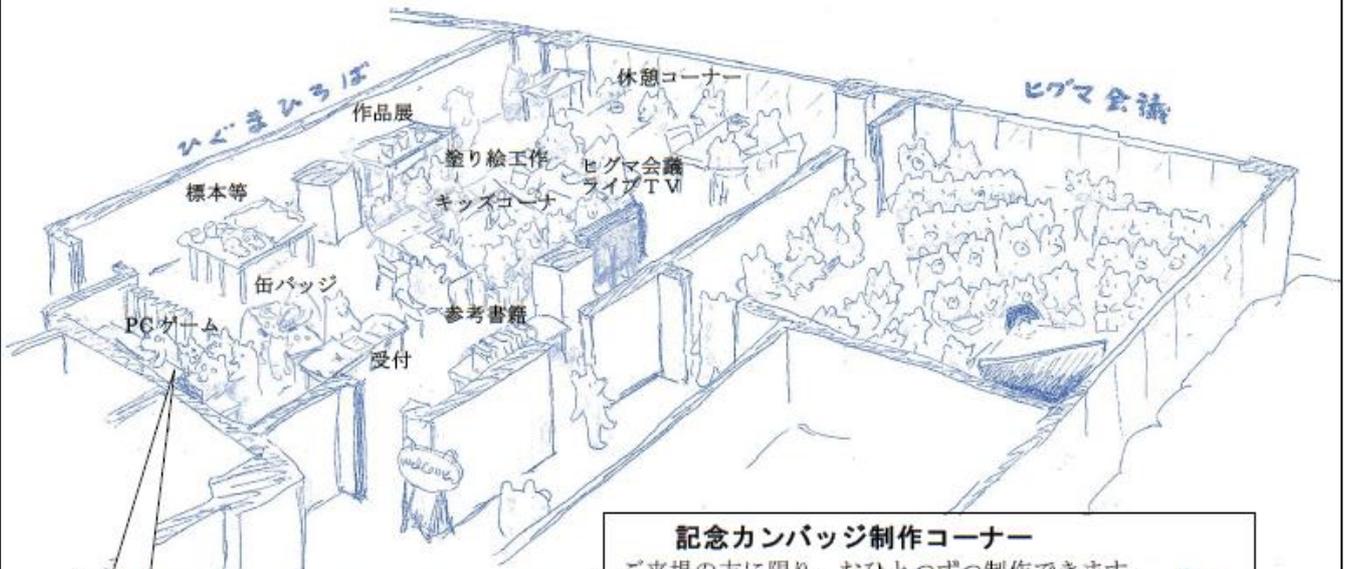
- ・午前の部ダイジェスト&ヒグマ作品紹介・・・・・・・・事務局ほか
- ・匂いによるアライグマ誘引効果と捕獲への応用・・・田中 蓮 （酪農学園大学 4年生）
- ・アライグマの普及啓発に関するアンケート調査・・・青木隼斗 （酪農学園大学 4年生）
- ・被害対策がヒグマの農作物被害に与える影響・・・直島夕花 （酪農学園大学 4年生）
- ・野生動物の被害対策と作物収量の関係・・・・・・・・金井大地 （酪農学園大学大学院修士課程）

14:00～

- ・ニホンカモシカの個体間の距離と血縁関係・・・中野あかり （酪農学園大学 4年生）
- ・浦幌・白糠丘陵の長期的ヒグマ研究の経緯と展望（仮）・・・菊地静香 （酪農学園大学大学院博士課程）

15:00～

- ・総合討論 総合質疑（16:00 終了）



ゲームコーナー 仲良く交代して使ってね

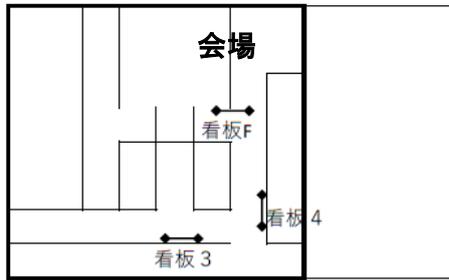
<p>ひぐまひろば CONTENTS</p> <p>山中模索PCゲーム ミスバショウを食れ!!</p>	<p>ひぐまひろば CONTENTS</p> <p>跡準管制PCゲーム 能わざれば撃つべからず!!</p>	<p>ひぐまひろば CONTENTS</p> <p>PC版ヒグマクイズ ひぐま百般三択版</p>
---	---	--

記念カンパジ制作コーナー

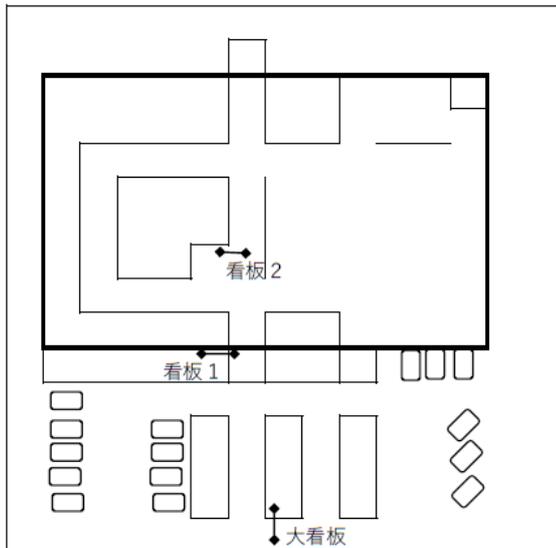
ご来場の方に限り、おひとつずつ制作できます。図柄は無地の紙にご自分で描くことができます。また、印刷済みの第7回オリジナルデザインから選びいただくこともできます。封入前であれば自由に加筆できます。

第7回占冠村ヒグマミーティング 会場配置図等

全体配置図



2階



1階/屋外

看板F 天井高さ・通路全幅
 ウェルカムボード 香純
 受付・ひろば・会議 印刷？

看板4 A3プリント
 「ヒグマミーティング」
 「通路奥」 & 矢印 印刷

看板3 A3プリント
 「ヒグマミーティング」 印刷
 「このさきひだり」 印刷
 & 矢印 印刷

看板2
 前回のそのまま流用

看板1
 「ヒグマミーティング入り口」
 前回のそのまま 印刷
 再制作 印刷

大看板
 前回のをそのまま
 要補修 手書き



大看板



位置3



位置

会場配置図



第7回占冠村ヒグマミーティング 実施状況写真

1. ヒグマ会議



全景



発表実施状況



ヒグマ作品展 展覧作品披露



ひぐまひろば内モニター運用状況



発表実施状況

2. ひぐまひろば



会場風景



ヒグマ会議ライブモニター



標本展示コーナー



図書コーナー



ヒグマPCゲームコーナー





参加者による手描き作品



実行委員会オフィシャルデザイン

オリジナル缶バッジ製作コーナー

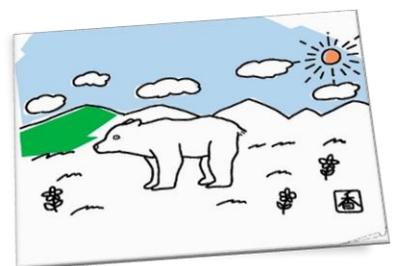


塗り絵コーナー／キッズコーナー



資料掲示コーナー

茶菓コーナー

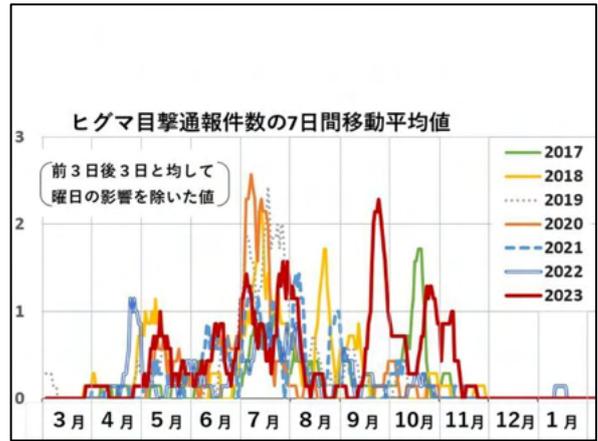


占冠村発表「令和5年期の村のヒグマ情勢」スライド抜粋

令和6年1月27日
第7回占冠村ヒグマミーティング

令和5年の
占冠村のヒグマ情勢

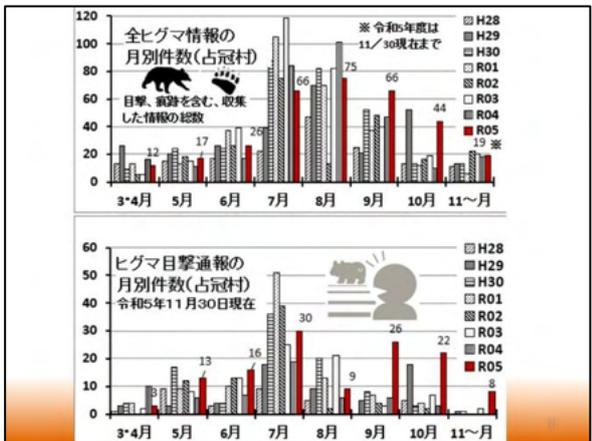
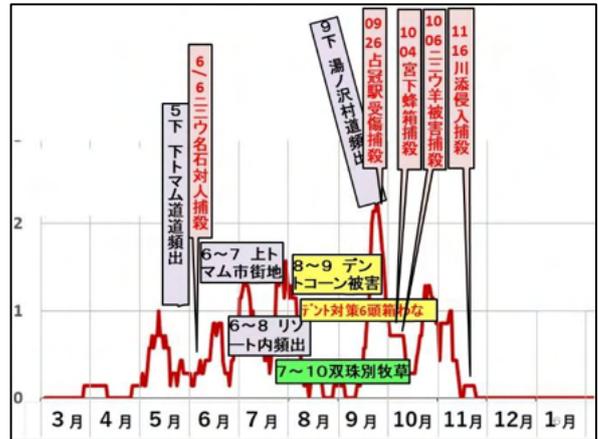
占冠村 農林課 林業振興室
野生鳥獣専門員 浦田 剛



今年までの概況

表1 ヒグマ情報件数	平成30	令和元	令和2	令和3	令和4	令和5
イ 収集情報総数	305	293	223	339	304	325
ロ 目撃情報件数 (イ内数)	106	113	81	93	63	132
ハ 通報された目撃 (ロ内数)	93	98	72	81	57	127
ニ 調査による目撃 (ロ内数)	13	15	9	12	6	11

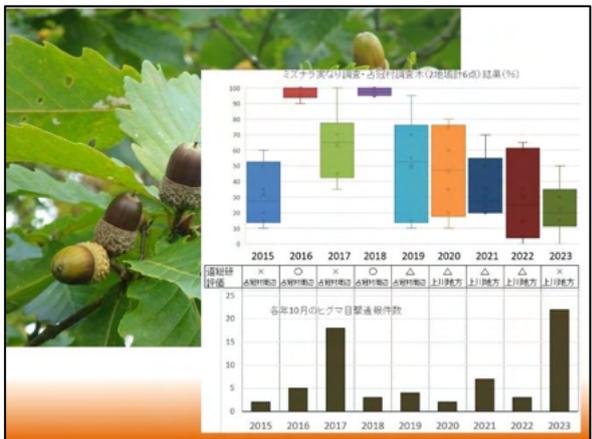
ヒグマ出没動向の年次比較(占冠村)



令和5年の個体対応 case 1

2023年5月19日 下トナム通出沿い出現個体の識別情報および対応要領

- 特定個体の顔出し(利用場所十人隠れ)
- 銃戦・看板・追い出し
- 自然解消(移動?)



令和5年の個体対応 case 2

2023年6月6日 ニウ名石橋村迄の対人接触個体の識別情報および対応状況(第二報)

<要点>
村内の河川でヒグマが釣りに接近し、魚釣り機に接触する事案発生。移動して野生鳥獣専門員が現場対応。当該個体の可能性が高いと判明された一頭体の捕獲した。さらに継続して対応中。

ヒグマ

釣人

↓ 駐車位置は写真手前側

令和5年の個体対応 case 3 上トマム

人家近くを頻繁に利用
人由来の食べ物は利用せず
フキ、ミズパショウ、アリを食う
人目につくのは母子や若齢個体
成雄はほとんど見られていない

令和5年の個体対応 case 6

2023年9月26日 宇中央浄化センターにおける列車接触個体への対応状況

<概要>
前夜20時ごろ、JR石巻線の占冠駅構内にて当該個体と列車が衝突。翌朝に付近を捜索し、住宅の庭で発見した生存状態で発見。個体自力での移動が困難と推測されたが、放棄すれば住民等に危険が及ぶ恐れがあり、その場で銃により死せしめた。

野原主幹撮影 9月25日20時21分
浦田調査状況 9月26日11時
捕獲個体外観

ボランティア活動による草刈りイベント

草刈り→視程の改善・餌の除去

令和5年の個体対応 case 7

2023年10月4日 宇中央宮下における養蜂場周辺個体への対応状況

<概要>
10月3日の夜、宮下の市街地にヒグマ1頭が侵入して養蜂場を食害し、このことが翌4日朝に判明した。同日中に付近を捜索したところ、隣接するメロン畑への侵入記録も発見された。当該個体の捕獲を目指してさらに捜索。翌5日の夕方、畑に侵入したヒグマ1頭を発見。これを捕殺した。その後も引き続き警戒態勢を維持している。

法第38条2の確認結果
午後5時の観察状況
圃場に続く見物
捕獲個体外観

令和5年の個体対応 case 4 中トマム トマムリゾート

2023年6月16日 中トマムスキー場出現個体の識別情報および対応要領

- 複数個体の頻出 (利用場所+人慣れ)
- 観察・看板・追い払い
- 自然解消 (移動?)

令和5年の個体対応 case 8

2023年10月5日の宇玉川における養蜂場周辺個体への対応状況

<概要>
10月5日の夕方、宇玉川の果樹公園内の養蜂場 (コロカブーム) にて、ヒグマによる養蜂場の食害が発生した。同日中に果樹公園の養蜂場を食害したヒグマの侵入記録も発見された。当該個体の捕獲を目指してさらに捜索。翌6日の夕方、畑に侵入したヒグマ1頭を発見。これを捕殺した。その後も引き続き警戒態勢を維持している。

ヒグマ出現履歴
10月5日観察見物時の位置関係
10月6日早朝の作業実施状況
捕獲した捕獲個体

令和5年の個体対応 case 5 双珠別牧草採食

9/23 15:15 中小型1 自撃退
9/24 14:30 雌1+雄1 追い払い
10/23 16:30 中型1 牧草地から追い払い
11/2 中型1 牧草地
10/16 中小型複数
11/7 7:20 中小型1 牧草地から追い払い
11/5, 11/6 中型1または2 牧草地で採食
村道沿い採草地で中小型単独個体の頻出
10/18, 10/19, 10/20, 10/26, 11/2
双珠別近況地図 2023.11.7

令和5年の個体対応 case 9

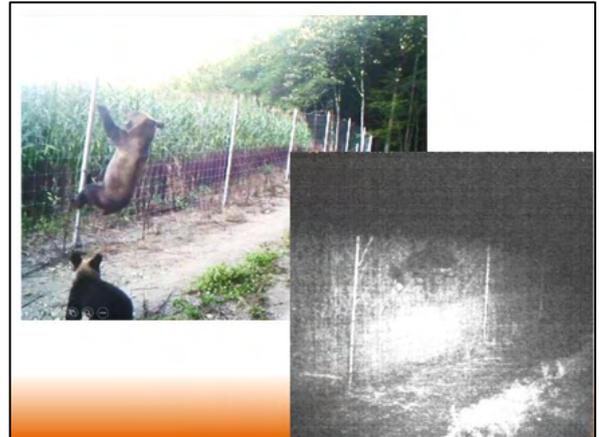
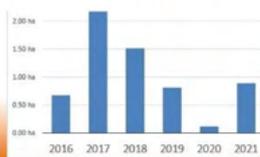
2023年11月16日 宇中央宮下における住宅接近個体への対応状況

<概要>
11月16日の午後3時ごろ宇中央宮下行政区の川面団地に、住民が敷地内にある小型のヒグマ1頭を発見し村役場に通報した。直ちに担当者らが現場に赴き当該個体を確認。ヒグマが逃げずにその採食を続けていたため捕殺すべきと判断。セブンを威圧して住宅地の外に移動させた後、銃を用いて捕殺した。

現場到着時
1500 個体発見
1517 対応開始
1556 捕獲地点
最終の捕獲地点

デントコーン被害

- ・ 昨年からシカ柵導入による資源量の変化があった。
- ・ 一部のシカ柵付き圃場で電気柵付加の試験中。
- ・ 被害面積は未集計ながら、少なめの予想。依然として年による変動や場所によるばらつきが大きい
- ・ 被害面積の年変動は、作付状況やヒグマの個体数に比例しているわけではなさそう
- ・ 圃場により被害の出方が異なるが、ヒグマの分布や、防除の有無による違いでもなさそう。味か？



新たな課題
シカ柵の突破と損壊

2023年捕獲

有害鳥獣駆除
生活安全被害防止…4
農業被害防止…7
(箱6+銃5)

狩猟…0
捕獲技術者育成…0
学術捕獲(生捕)…2
(事故等死亡確認…3)

月	H28	H29	H30	H31	R02	R03	R04	R05
3月	0	0	0	0	0	0	0	0
4月	0	0	0	0	0	0	0	0
5月	0	0	0	0	0	0	0	0
6月	0	0	0	0	0	0	0	0
7月	0	0	0	0	0	0	0	0
8月	1	1	1	1	1	1	1	1
9月	1	1	1	1	1	1	1	1
10月	0	0	0	0	0	0	0	0
11月	0	0	0	0	0	0	0	0

捕獲日	捕獲者	性別	年齢	体長	尾長	体高	体幅	捕獲場所	捕獲方法	備考		
1 銃	6月6日	浦田 剛	M	2,333	1	41	106	63	69	9.9	名石・熊倉確保・北沢	生活安全
2 箱	8月15日	高橋裕美	M	2,431	5	184	183	124	98	14.4	F01	農(子)
3 箱	9月10日	鈴木雅士	M	2,331	10	240	195	132	101	14.6	F14	農(子)
4 箱	9月21日	高橋裕美	M	2,431	2	64	126	71	68	11.8	F01	農(子)
5 銃	9月26日	浦田 剛	M	2,333	5	103	172	91	86	12.8	高台列車衝突	生活安全
6 箱	10月3日	高橋裕美	F	2,431	8	93	153	86	74	11.7	F01	農(子)
7 銃	10月4日	浦田 剛	M	2,333	2	89	144	87	83	12.3	宮下	生活安全
8 銃	10月6日	黒井宏幸	F	2,322	8	93	155	85	79	11.7	ニノフ	農(牧)
学 箱	10月17日	伊藤哲治	F	2,333							F21種源放逐	学術捕獲
9 箱	10月19日	鈴木雅士	F	2,333	6	111	154	98	78	11.2	F19	農(子)
10 箱	10月17日	高橋裕美	F	2,431	4	114	155	96	79	13.1	F01	農(子)
学 箱	11月3日	伊藤哲治	M	2,333		216					F21種源放逐	学術捕獲
11 銃	11月16日	小尾雅彦	M	2,333	0	13	75	42	50	7.1	宮下	生活安全

2023 電気柵 (複合柵) 実証試験

(酪農大・占冠村・鈴木牧場)

人が独占的に確保したい場所・・・

占冠村最大の都市「宇中央千歳」

電気柵、まさかの正面突破を喰らう

諦めずいくつかの架線方式を試した

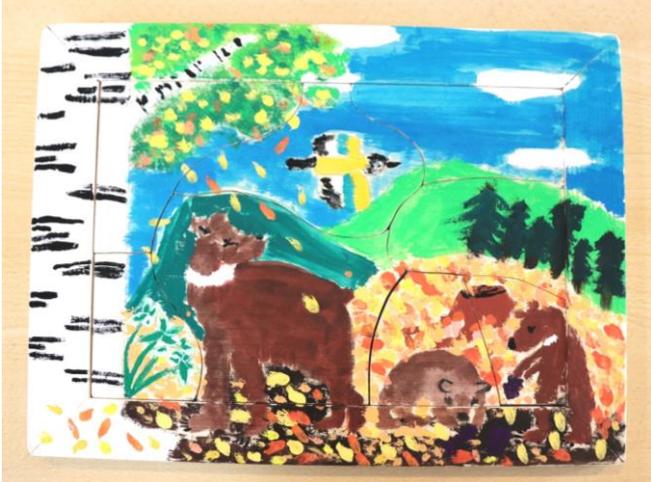
令和5年の対応

- ・ 特定個体を捕獲する必要を認めたケース5件すべてにおいて、対象個体に絞った素早い捕獲に成功した(すべて銃による)
- ・ 捕獲の必要なしと判断したほか幾多のケースでは、監視や追い払いを交えながら、事故に至らせることなく危険の解消へ導くことができた
- ・ 把握できる事象はごく一部に過ぎず、人身事故の発生のおそれは常にあった

(以上)

ヒグマ作品展 出展作品

今回のヒグマ作品展では2点の出品がありました。開催中、ひぐまひろばで展示するとともに、ヒグマ会議の中でもご紹介しました。



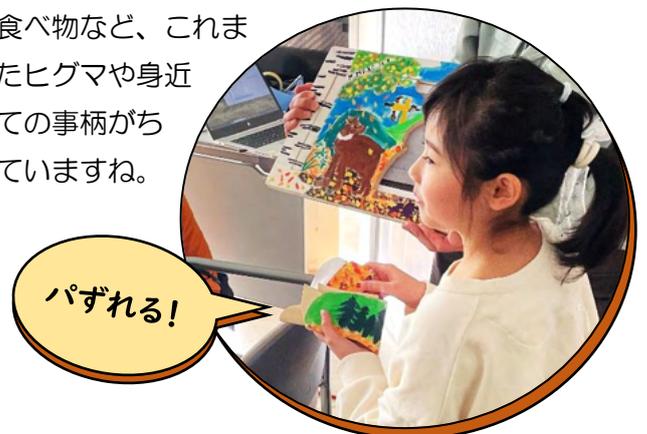
ヒグマパズル
上トナム 伊藤美羽さん作

ヒグマパズル
上トナム 伊藤瑛美さん作



上トナムの伊藤美羽さん瑛美さん姉妹による絵画作品「ヒグマパズル」。おふたりのおじいさまが木の板を切り抜いて作った土台に、ご自身で考えたヒグマの絵を描きました。ばらして組んで、何度でも遊ぶことができます。

すぐれた画面構成と色配置のたいへん美しい絵ですが、よく見るとヒグマの仕草や色模様、この土地らしい林相、様々なヒグマの食べ物など、これまで学んできたヒグマや身近な森についての事柄がちりばめられていますね。



ご出展ありがとうございました。